慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山崎覚次郎著 経済原論
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.6 (1917. 6) ,p.841(135)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170601-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

Chin chu, The tariff Problem in China.

最近我邦に於て最も多く世論の注意を促せしものは云ふ迄もなく、支那關稅改訂問題となす。而して此問題に對する我識者の論議は多く本邦の經濟的利害得失を力說するに急なる結果として、稍もすれは之れが支那方面に及ぼす影響の是非如何を論究する點に於て遺憾少からず、而して此缺陷を補充するものは即ち本書にして、一面此著は支那の智識階級が果して本問題に對して如何な見解を有するやを知るの好資料たり。本書は前後の兩篇に別たれ、前篇は主として、支那其者に於ける關稅の發展史にして、著者は之れが歷史を四期に區別し、第一期は四曆十四世紀の頃より南京條約（一八四三）迄、第二期は南京條約以後千八百八十五年迄、第三期は千八百八十五年より千九百六年迄、第四期は千九百六年より今日迄、となせり、而して支那現時の問題としては著者は一面、現實五分稅改訂說を主張すると共に、又た他の一面に於ては、鹽金の廢止と關稅率增加の問題とを研究するの必要なる所以を論ぜり、即ち著者自からの言を借りて云へば支那に於ける商業上の見地よりして列强の正當なる政策は支那人の消費能力を發達せしむるにあり、然かも之れが能力の發達は鹽金を癈止するにあらずんば到底不可能なり、但支那政府にして此間有効なる補充財源を以てするにあらずんば、鹽金癈止は恐らく困難なる問題を惹起するに至る可しと云ふにあり、尙ほ著者は同じく前篇に於て關稅其者を政治經濟、財政の諸方面より觀察し、進んで關稅と內地稅との關係、支那其者の商業政策に及べり、次ぎに後篇に於て、著者は主として關稅の行政組織方面に於ける變遷、海關の組織、關稅行政に關する自己の見解等を以てし、更に附錄として、支那現時に於ける稅關の所在地、千八百六十四年より千九百十三年に至る同國關稅の收入表、同時期間に於ける支那其者の輸出入額等を以てし、出來丈け、本問題の眞相を明かにせんとせり、蓋、對支問題の喧しき今日に於て、本著の如きは誰人も一讀するに足る好個の參考材料たるを失はざるものなりとす。（阿部生）

山崎覺次郎著『經濟原論』

大正六年四月有斐閣發行
菊版三百六十二頁定價一圓六十錢

本書は經濟學の全般に亘りて學理と實際とを簡明直截に講述し、大學程度の學生に斯學に關する正確なる知識を與ふる事を主眼とせるものであると思はれる。其記述の體裁は普通の形式に依りて第一編緖論、第二編生產、第三編交易、第四編分配並に第五編消費の順序を以て解說を進め、各編に論述せる種々の項目も概ね世間に行はるゝ經濟原論の項目と略ぼ同一である。然しながら、各論題の內容に至りては決して換骨奪胎的のものではなく、著者獨得の鋭利の論法と穩健眞摯の筆致とを以て獨創的解說を試みて居らるゝのみならず、未だ經濟學者間に於て全然學說の一致せざる幾多の問題に就きては政然著者の持說を披瀝し、且つ其の正確なる所以を徹底的に說かれて居る。二三の例を擧ぐれは、財貨に就きては山崎博士は全然物體說を採りて、無形物をば經濟財と看做すの誤れることを指摘し、貨幣の効用に關しては財產の大小に依りて等差を生ずるものなる事を適切なる假例を設けて說明し、更に利子の本質に就きては利子を以て資本と爲す通說を排して貨幣說即ち利子を以て貨幣の使用料と看做すの說を採り、從つて利子步合論に於ても資本の生產力が利子步合を定むるものであるとか或は之に類似せる舊說に一顧も與へず、金利は資金の需用と供給との關係に依りて定まるものであると論斷され、且つ利潤論に對しても傳說的記述に依らずして實際と合致せる說明を加へてある。又、其解說の方法に就きて云ふも、本書には慥かに一個の特長を備へて居る。それは複雜難解の學理の說明に對して容易に模倣し難き適切巧妙なる譬喩を用ひられて居ることである。

要するに、本書は其外形に於て何等新奇を裝はず、其內容に於ても學理の論理的敍述土毫も益する所なき術學的引照を以て讀者を煩はすの通弊に陷ゐることを避けたる一箇の謙讓的著作ではあるが、其論構の秩序井然として一片の獻句冗節を交へず、論法は犀利明確で、出來得る限り科學的に經濟學を取扱ひ、而かも解說が輕妙剴切であるが爲め讀者をして興味津々たるを覺へしむるの點に於て本書の右に出づる經濟原論を求むることは蓋し困難であると思はれる。本書は又其容積に於ては大著述ではないが、正確と簡潔と明瞭とを特長とせる點に於て後學に模範を示したる一名著と云はざるを得ない。